

景観生活-西宮編 No.2.2

1 景観生活とは

いつかのことでしょう、「景観」ということばを身近に耳にするようになったのは・・・。

これは、いい景観が増えたからではありません。

ひとは、無くしたものの大きさに気付いたときに始めてそういった言葉を使うものです。

西宮に暮らしていて、「景観」という言葉が気になるようになったこのごろ、ちょっとした危機感を通じて、生活のなかの「景観」を綴ることとします。

それが、「景観生活」。

2 景観サポーターとは

兵庫県には景観形成推進員(景観サポーター)制度があります。

平成21～23年度景観形成等推進活動助成を受け、HPやこの冊子の制作管理を行っています。

今年度は、西宮市景観まちづくり課から、市所有の建物を「景観」という視点で検証してみようとの発案があり、その中でも市立小学校や比較的古い公共施設を訪ねてみました。

市立小学校のほとんどが昨今の耐震化政策により、耐震改修か建て替えが行われており、老朽化し耐震性能の劣る建物はほとんど残っていなかったのです。

私自身の母校もそうですが、昔通った学校が姿を消すのは寂しいことです。でも逆に新しい環境を提案するかたちの学舎が表れ、新しい景観を作っていることに触れ、新たな希望も生まれた今年度でした。

願わくば、息長く市民と共にある公共建築であればこそ、建設当初の設計意図(コンセプト)を後の増改築が台無しにしてしまうことだけは避けて欲しいと感じました。

このサイト&冊子は、西宮市景観まちづくりグループの応援団でもあります。

行政を通じてできること、できないこと、自ら市民が考えること、地域の企業が実施することなど多様な視点で、景観を考え、よりよき西宮市の景観に寄与することを願っています。



目次

景観生活	1
今津六角堂	2
西宮市民会館	4
旧船坂小学校	8
西宮の学校	10
西宮の学校建築と景観	12

西宮の景観ハイライト

- 海と山、自然と都市空間の両方が映えるまち、西宮
- 阪神間モダニズムの拠点、ハイカラ文化圏、西宮
- 神さん、お寺さん、信心と宮水のまち、西宮
- 国道に高速道路、私鉄やJR・新幹線が貫くまち、西宮
- 秘めてきらめく里山文化、西宮北部



今津六角堂の景観について

文 藤井成計

大阪と神戸を結ぶ幹線道路である国道43号線の1筋南に、街路樹の豊かな酒蔵通りが東西に通っている。歴史ある西宮市立今津小学校はその通り沿いに有り、今津六角堂が小学校地内の南正門横の一郭に、通りに対して南面する形で建っている。今津六角堂の佇まいは明治の文明開化の雰囲気をも今に伝え、酒蔵通りに歴史を偲ばせる景観を提供している。

江戸の頃から学問の村であった今津では、飯田桂山が宝暦5(1755)年、海辺に大観楼という学舎を建て、学者を招き教育を行っていた。明治5(1872)年、学校制度を定めた学制が公布され、全国で小学校が開校されていった。教育熱心な土地柄であった今津は、翌明治6(1873)年には今津村、津門村が連合し常源寺を仮校舎として今津小学校を創立した。その後、明治15(1882)年、教室の狭小により仮校舎を廃して、洋風建築の小学校校舎(今津六角堂)を建設する。

正門に南面して六角堂校舎が建ち、両翼に別棟の平屋建ての洋風校舎が配された。建設費8000円の内5200円は村民有志326名の寄付金により賄われ、地域をあげての大事業であった。校舎を洋風建築で建てたのは、明治10(1877)年に布達された

災禍をくぐり抜け、三度の移築。「六角堂」名付け親は兵庫県知事。

●建物概要

- ・所在地: 西宮市今津二葉町4-10
- ・構造: 木造、階数2、寄棟造棧瓦葺
- ・竣工年: 明治15(1882)年
- ・明治15年施工: 松本源七
- ・移築履歴
 - 昭和30年校庭西側(公民館)
 - 昭和40年校庭北側(幼稚園)
 - 平成10年校庭南東(歴史資料室)

●藤井成計プロフィール

- ・一級建築士／兵庫県ヘリテージマネージャー
- ・有限会社アトリエ・パル 代表取締役・管理建築士
- ・西宮市在住
- 1948年／神戸市生れ
- 1972年／神戸大学工学部建築学科卒業
- 旭建築事務所／都市・計画・設計研究所勤務
- 1995年／アトリエ・パル開設

「兵庫県公立学校建築法」にて洋風校舎が推奨されていたこと、近くの西宮小学校が既に洋風校舎で竣工し刺激を受けたこと、文明開化の流れのなかで地域の教育にかけた熱意が大きかったことが背景にあった。にわかにも出現したモダンな洋風校舎には近在から見学者が訪れるほどになり、地域の人々の誇りであった。同年、東隣に戸長役場が建ち地域の中心的な建物となる。

六角堂はその後、校地内を3度移築改修され、そのたびに用途変更による新たな役割を担いつつ再生され続けてきた。昭和30(1955)年、校地南西隅に玄関を東向きに移築し公民館として開館する。この時、外観は保存されたが内部は用途に合うよう改修された。昭和40(1965)年、新公民館の建設に伴い取り壊しの危機があったが、地域住民の熱心な保存運動により、校地北側に玄関を南面させて移築し幼稚園舎として再生されることになる。外観の原型を往時のままにとどめ、内部は改修して遊戯室及び管理室とした。この折、時の兵庫県知事より著名な文化財として「六角堂」との命名を受ける。平成7(1995)年の阪神淡路大震災では幸いにも大きな損傷は受けず、平成10(1998)年校地南側正門横の現在の地に小学校学舎として移築改修され、歴史資料室・地域交流の場として活用されている。同年「兵庫県さわやか街づくり賞(建築部門)」を受賞している。

今津六角堂は木造洋風建築2階建、寄棟造棧瓦葺。左右対称形の建物で南正面中央に六角形の張り出しをもつ。寄棟屋根の軒出は短く、曲面付き線形の軒蛇腹を四周に廻す。外壁は下見板張ペンキ塗の仕上げで、1、2階の間に胴蛇腹を廻し、四隅にコーナーストーンを象った隅柱を飾る。正面外観は張り出しの左右に線形付き幅広の窓枠をもつ縦長の両開き窓を1、2階とも同じ位置、同じ形状で開けている。当初を表す古い図にはアーチ窓に両開きの鎧戸が描かれているが定かではない。側面も同じように縦長窓が開けられているが中央は幅広窓である。当初は渡り廊下で別棟教室に繋がっていたので両開扉が設けられていたためであろう。外壁足元は花崗岩切石2段積による基礎が丁寧に廻されている。

この建物の特徴は建物名の由来にもなっている、正面中央に突き出した六角形(正確には八角形の半裁の平面形)の張り出しである。1階は吹き放ちの玄関ポーチで2階は全面に腰壁付引違ガラス窓のある明るいサンルーム空間となっている。屋根は寄棟の主屋から張り出す形で宝形棧瓦葺の仕上、棟の頂部には木製の尖頭を飾り



明治初期の洋風建築、無冠の文化財

シンボル性を高めている。尖頭に付けられている方位飾りは保護を兼ねた改修時の付加物である。ポーチは丸面の花崗岩段石により、張出しと同じ形で地面より3段高く持ち上げて造られている。奥正面には縦形付きの木枠に両袖、欄間付きのガラス入り両開扉の玄関が迎えてくれる。張出しを支えるのは、ポーチ床に礎盤石を据え柱頭に縦形の飾りをもつ6本の丸柱である。丸柱は2階まで延び、軒先と中間部に主屋と同じ蛇腹を廻し一体感を表出している。2階は柱間のすべてに井桁に組んだ格子の中にX形格子が入る腰壁にガラス引違窓を備える和洋折衷の表現となっている。明治4(1871)年に着工した神戸の三井組の絵図面に同じような手摺意匠が見られることから、建設にあたっては神戸・大阪の先進地域の洋風建築を参考にしたものと思われる。2階張出し部分は全面にガラス窓の設けられた明るい開放的空間であり、当時の人々に文明開化を実感させたことだろう。建物正面中央に張り出し、望楼等を設け意匠を凝らし強調するのは、明治初期の洋風建築の特徴の一つである。

現存する代表的な明治初期洋風建築の小学校は、松本市にある旧開智学校(明治9年竣工)であるが、そこで見られるような奔放で破天荒な和洋折衷の造形はここでは見られない。竣工は少し後(明治15年)ではあるが、既に洋風建築の基本を押さえた堅実な意匠であり、建物のプロポーションも良い。六角形の張り出しをつけることにより独自性と正面性が加えられ、小振りで愛らしい魅力的な洋風建築となっている。

建物内部は用途変更による改修により当初の姿を留めていないが、解体された別の旧校舎の段板を再利用して造られたT字型階段は旧来の雰囲気を与えている。当初、1階は中央の玄関を挟んで西側に職員室、東側に応接室が配され、2階は裁縫室として使われたようで、教室は渡り廊下で繋がる別棟の平屋建洋風建物内にあったようだ。

3度に亘る移転、改修により、当初材が失われている割合が高いが、棟木、小屋梁、基礎石、玄関の段石、礎盤石、丸柱及び柱頭縦形、軒蛇腹、胴蛇腹、出隅飾り柱、窓枠等の一部は当初材と思われる。内部は大部分が改修されているが、外観は概ね当初の姿を今に伝えている。建設から約130年間、時代の要請を有縁の人々の思いを力に移転、用途変更という手段で柔軟に受け入れつつ再生され続け、現在当初の位置近くの理想的な環境のもと今津の地に誇らしく建っている。今津六角堂は明治前期の洋風学校建築として兵庫県下では最も古い遺構であり、歴史文化的景観価値として高いものがある。

●参考資料

- 1・今津六角堂 展示資料
- 2・今津小学校六角堂移転改修他工事設計図書 平成8年度 共同設計株式会社
- 3・日本学校建築史 1973年 菅野誠
- 4・今津学校ノ図「兵庫県下有馬・武庫・菟原豪商名所独案内の魁」神戸市立博物館蔵
- 5・西宮あれこれ
- 6・ふるさと春秋1988
- 7・今津物語ー今津小学校創立百周年記念ー 今津小学校百周年記念事業委員会 昭和48年
- 8・職人たちの西洋建築 初田亨 講談社 1997年
- 9・兵庫県近代化遺産(建造物等)総合調査報告書 兵庫県教育委員会 平成18年
- 10・明治の学舎 中村哲夫 小学館 1997年
- 11・棟梁たちの西洋館 増田彰久 中央公論新社 2004年



参考文献

掲載雑誌

『新建築』1966年1月号
『建築文化』1967年5月号
『近代建築』1967年6月号
『SD』1967年10月号

参考図書

『現代日本建築家全集14』1972年
三一書房
『増田友也著作集』1999年 ナカニ
シヤ出版

田中栄治プロフィール

1967 大阪府大阪市生まれ
1991 神戸大学大学院工学研究科
建築学専攻修士課程修了
1991～99 株式会社坂倉建築研究
所大阪事務所
2000 田中栄治建築設計事務所開
設
2004～ 神戸山手大学現代社会
学部環境文化学科准教授を兼務
2008 一級建築士事務所田中＋青
山開設

西宮市民会館

文 田中栄治



西宮市民会館は、阪神西宮駅市役所口改札を出てすぐ北側、西宮市役所本庁舎の南にある。地下1階・地上6階建て、1,242人収容のアミティホールと大中小合わせて12の会議室、アミティギャラリー、公益財団法人西宮市文化振興財団事務所からなる複合施設である。設計は、図面の記載では京都大学教授・工学博士・一級建築士・増田友也による設計指導のもと、財団法人建築研究協会一級建築士事務所となっているが、雑誌発表時の担当者名から実質的には京都大学工学部建築学科増田研究室が担当したと考えられる。(120111訂正)竣工は1967(昭和42)年3月である。

建築家 増田友也

増田友也は、1914(大正3)年兵庫県三原郡八木村(現在の兵庫県南あわじ市)に生まれた。1939(昭和14)年京都大学工学部建築学科を卒業後、満州炭鉱工事課に勤務した。戦後1950(昭和25)年京都大学講師に就任し、1962(昭和37)年に同大学教授になる。1981(昭和56)年没。大学での研究対象は、建築空間論から建築的存在論に展開し、さらには「建築以前」へと広がっている。研究活動と同時に、1960～70年代を中心に積極的に設計活動を行い、造形性の高い作風の建築を数多く発表した。おもな設計建物は、倉敷市庁舎(1960)、鳴門市民会館(1961)、京都市蹴上浄水場本館(1962)、衣笠山の家(1962)、鳴門市庁舎(1963)、東山会館(1963)、智積院会館(1966)、豊岡市民会館(1971)、京都大学総合体育館(1972)、鳴門市勤労青少年ホーム(1975)、鳴門市老人福祉センター(1977)、鳴門市文化会館(1982)など。旧建部歯科医院は国登録有形文化財、鳴門市民会館・鳴門市庁舎はDOCOMOMO選定建物になっている。

シビックセンター計画

西宮市民会館の設計に先立ち、京都大学増田研究室と西宮市において街区全体のマスタープランが作成されている。この計画は、市の行政・文化・社会活動の中核となるべきシビックセンターの提案であり、かつ京阪神都市圏の機能的核としての将来性を考慮したものであった。また、ここにまったく新しい特色ある都市景観を造形して、西宮市の風土的中心を与えることを意図したものであった。

マスタープランの内容は以下の通りである。



- ・敷地中央部は共通部分としての広場の役割を持った地上2階のプラットフォームとする。
- ・プラットフォームの周囲に市行政管理・一般業務管理・社会福祉諸施設・文化施設等の建築群を配置する。
- ・敷地はできるだけ集約して建築し、緑地・広場や共通に使用できるスペースを確保する。
- ・事務棟等はあるべく高層化し、可能なものは超高層の計画を立てることが望ましい。
- ・敷地内に既存の市庁舎や市立図書館等の少数の建物は恒久的に保存利用するものとしてマスタープランのなかに取り込む。
- ・敷地に多い楠木等の大樹を保存し、これを中心として庭園風緑地とする。
- ・地上や建物の1階等は原則として自動車等機械装置による交通および駐車に供する。
- ・主アプローチは南北より敷地中心部に行なう。
- ・周囲の道路は主にサービスアプローチ用とする。
- ・人の交通は原則として自動車交通とは違った2階のレベルで行う。
- ・建物・陸橋・広場・緑地を継ぎ一貫したネットワークを組む。
- ・マスタープランの計画は長期にわたって実施されるものであり、工期計画が重視される。
- ・時期に応じて計画の選択枝を作成できるように、計画の原理を明確にしておかなければならない。



「建築の造形は、シビックセンターに豊かな表現を与え、市民の都心に対する象徴的なイメージを与えることのできるように意図された」

西宮市民会館は、このシビックセンターの一部として計画され、再開発の「核」として将来市庁舎との接続ともなる広場のプラットフォームの一部とともに1967(昭和42)年3月に完成したものである。

西宮市民会館

京都大学増田研究室と西宮市当局との相互の検討の上で明らかにされたマスタープラン計画案を主要条件として西宮市民会館の設計が行われた。西宮市民会館の建物は、音楽・映画・演劇等の多目的な催物が可能な大ホール(アミティホール)と、結婚式場・集会室を中心とする2つのブロックに分かれ、相互の融合的な利用と平面計画上の考慮が行われている。さらに、大ホールは客席・ホワイエと舞台・楽屋の2つのブロックに分かれているので、建物の外観は大きく3つのブロックに分けて設計されている。主要構造は鉄筋コンクリート構造一部鉄骨構造であり、集会室や宴会室の大小、さらに大ホールのホワイエ等をひとつのシステムの高さ関係に納めるために基準階高を3,000mmとし、梁やプレキャストコンクリートやコンクリート目地等の割り付けを床から150-1,000-100-1,000-150-600mm(計3,000mm)のモジュール系列を基本として、そのバリエーションにより建物全体に特有のリズムを与えている。建物の外壁仕上げは①コンクリート打放し仕上げ、②コンクリートハツリ仕上げ、③コンクリート打ちのまま、④プレキャストコンクリート、⑤モルタルガン吹き付けの各種表面処理の上に吹き付け仕上げの組み合わせで構成されている。





建物東側で緑地・広場に面した大ホール舞台・楽屋のブロックは、1階の楽屋まわり以外が無窓で高さのある直方体の建物になるため、外壁のコンクリート目地のリズムと各種表面処理の組み合わせによる構成、それに加えてピアノ置場の曲面や排煙口・楽屋まわりの目隠しコンクリートパネルの突出によるアクセントにより、外観の圧迫感や単調さをやわらげるように配慮されている。

建物中央の大ホール客席・ホワイエのブロックは、舞台・楽屋ブロックと同様に外壁のコンクリート目地のリズムと各種表面処理の組み合わせによる構成、および照明室の曲面とその上部のバルコニー状の突出によるアクセントを持った大きな曲面の外壁が特徴的である。これは大ホールの大きな空間を作り出す鉄骨トラス屋根を支える柱断面が下にいくほど大きくなるのを外観に表したものであるが、それ以上に設計者の言葉にある「大ホールの外壁は、特にその前面にあるプラットフォーム（将来これは増築されて市庁舎と市民ホールとの間の広場になるべきもの）に対する壁面としてデザインされている。これはシビックセンターにおいて野外での集りや憩いが望まれるからである」（『建築文化』1967年5月号）という記述から判るように、西宮市民会館の主要条件となっているシビックセンターのマスタープランのなかでのこの壁面の意味を考慮していたことが重要である。つまり、この壁面はシビックセンターの中心となる広場（プラットフォーム）の背景としての位置付けが行われていた。曲面の壁は同じ増田友也設計の「智積院会館」（1966）にもみられ、また広場に対して曲面の壁を背景とする構成はル・コルビュジエの「ロンシャンの礼拝堂」（1955）や「チャンドイガールの高等裁判所」（1955）などにもみられる。また、この曲面の外壁足元の有機的な形態、浮いたように見える屋根形態にもル・コルビュジエの影響をみることが可能である。さらに、増田友也には初期から「壁」に関する論考が多くみられることから、西宮市民会館におけるこの曲面の壁は設計者にとって重要な意味を持っていたと考えられる。

建物西側の結婚式場・集会室のブロックは、建設当初は増田研究室の設計によるコンクリート梁と外壁プレキャストコンクリートパネルのリズムと各種表面処理の組み合わせによる構成、およびル・コルビュジエの影響が見られるブリーズソレイユとルーバーを持った彫りの深い造形性の高い外観であったが、現在は昭和58年の増築・外壁改修によりアルミパネルとガラスのカーテンウォールとなっており、当初の面影をみることはできなくなっている。

建物全体は、これら3つのブロックに加えて、大ホールホワイエの南北に配置された円筒状の2つ階段および西側の屋外階段が建物外観のアクセントとなっている。設計者は「建築の造形は、シビックセンターに豊かな表現を与え、市民の都心に対する象徴的なイメージを与えることができるように意図された」（『建築文化』1967年5月号）と記している。

また、市民会館と市庁舎を歩行者デッキでつなぐ考え方は、DOCOMOMO選定建物である増田友也設計の鳴門市民会館（1961）・鳴門市庁舎（1963）にすでにみられ、それをここではシビックセンターの中心的広場へと発展させたものである。



実現しなかった マスタープラン

現状

現在の建物外観としては、前述のように建物西側の結婚式場・集会室ブロックに関しては増築・外壁改修によりアルミパネルとガラスのカーテンウォール に覆われて竣工当時の外観は見られないが、大ホール客席・ホワイエブロックと舞台・楽屋ブロックおよび南北の円筒形階段・西側屋外階段に関しては、部分的 な改修は行われているものの竣工当時の外観がよく残っており、設計者増田友也の意図がよく表れている。

一方、西宮市民会館設計の主要条件となっていたシビックセンターのマスタープランは、その後実現されることはなかった。自動車は地上1階レベル、歩 行者は2階デッキレベルという歩車分離も実現に至らなかった。特に市庁舎との接続ともなる予定だった広場のプラットフォームは一部分のみが市民会館とともに完成しただけで、マスタープランで計画されていたうちの半分以上は建設されることなく現市庁舎の建設が行われた。この結果、西宮市民会館の建物の造形は その前提条件を失い、設計者の意図が薄れてしまっているのが現状である。2012.01.05



船坂小学校の歴史

明治6年(1873) 船坂善照寺本堂を仮校舎として開校(現在も善照学園を運営)

明治11年(1878) 現JA兵庫六甲・船坂支所の南に校舎新築

明治25年(1892) 船坂尋常小学校と改称

明治33年(1900) 現運動場に校舎を新築

昭和16年(1941) 船坂国民学校と改称

昭和30年(1955) 校地を北に拡大し、木造校舎(平屋)を新築

昭和31年(1956) 旧校舎を西に移築し、講堂を改築(のちのランチルーム含む)

昭和41年(1966) 西校舎2階に3教室を増築する

昭和50年(1975) 鉄骨 校舎増築

昭和59年(1984) 講堂兼体育館竣工(別敷地)

平成14年(2002) クロムくなる

平成17年(2005) 生徒は58人複式学級

平成23年(2011) 廃校

現在、地域での活用が模索されている

旧船坂小学校 里山の風景



文・写真 土佐道子

宝塚駅から乗車したバスが武庫川の支流である太多田川の谷あいの道を奥へと進むと、わずか10分ほどで阪神間の市街地とは別世界の山深い風景が広がる。かつて大坂から有馬温泉へと続く街道を行き交う旅人が目にした風景を彷彿させる。

緑の中、バスは蓬莱峡の奇岩を横に見ながら七曲がりの坂道をゆっくりと登っていく。

市街地とは別世界

バスがやっとのことで急勾配の坂を登り切って船坂の集落が開けた矢先、右手に見える山の稜線に沿ってずっと伸びた建物、それが旧船坂小学校の校舎だ。地元の人たちに100年以上愛され続けている小学校が真っ先に来訪者を出迎えてくれるのがほほえましい。さらに周辺にはかつての旅人も坂の難所を終えてほっと一服した場所にふさわしいのどかな日本の原風景が広がっている。バスを下車して、船坂アートビエンナーレや地元の情報を集めた新聞発行など地域活性化の中心メンバーである池田氏に案内をしていただいた。

この船坂集落は、宝塚へと繋がる太多田川と六甲山地から北に向かって流れる船坂川の交差点に位置し、農業に欠かせない水脈が複雑に交わっていることから奈良時代に遡る歴史ある集落であることがうなずける。また、江戸時代には有馬への湯治客で賑わった街道沿いにあり、湯船に使う木材の供給地として有馬温泉と深い関わりを持ちつつも、時代の波に飲まれることなく棚田と茅葺き民家に囲まれた静かな生活を守って来た。



そんな集落の人々の学び舎であった旧船坂小学校は西宮市で最も古い歴史を持つ小学校の一つで、明治の始めにお寺の本堂を間借りしてスタートした後、校舎の新築、運動場の拡幅にともなう校舎の移転、改築、増築を重ねながら徐々に小学校の体裁を整えて行った。有馬温泉への街道はこの小学校の運動場を挟んで両側に延びる竹林の小道だとのこと。さっそくかつての旅人の様に旧街道を通して東門から運動場に入ってみる。すると運動場の奥にあるダークブラウンの板張り壁に緑屋根の平屋校舎が正面で迎えてくれる。この校舎は大正時代*に建設された後に何度もの移築改築を繰り返し、近年はランチルームとして使われていた建物で、ここに近世と近代が融合した風景が生み出されている。そして旧街道は校舎の横を抜けて竹林の登り坂へと続き、今も旅人を茅葺き屋根の民家が残る 集落へといざなってくれる。

*西宮市管財課の財産明細には明治33年竣工とある。120111調べ



西宮市で最も古い歴史を持つ小学校の一つ

この小学校の校舎は、先ほどのランチルームに加えて、戦後裏山を整備して運動場から15m程高い位置に建設された2階建て校舎と外廊下式の平屋校舎から成る。運動場からジグザクの坂道をのぼって赤い屋根のかわいらしい木造校舎玄関を見上げるとなぜか懐かしい気持ちになるのはきっと私だけではないだろう。玄関奥の平屋校舎の外廊下には人研ぎの手洗い場と百葉箱、そしてその向こうに太多田川を挟んで裏六甲の山並みと棚田の風景が広がる。また教室にはガラス窓いっぱい裏山の緑が迫っている。遠くに広がる里山の風景と間近に迫る樹々の葉に囲まれた教室にたたずむと、子供たちが自然を体いっぱいに感じながらのびのびと学んでいた様子が浮かんで来る。2階建て校舎からはさらに絶景の棚田の風景やランチルームと運動場が見下ろせ、今も休み時間の子供たちの歓声が聞こえてくるようだ。ランチルームから立ち上る待ち遠しい給食の匂い、チャイムとともに大急ぎで運動場から校舎へ駆け上がって来る子供たち、きっと棚田で働く人々も子供たちの歓声に包まれたにぎやかな校舎を仰ぎ見ながら農作業に励んだことだろう。教室の窓辺に立ち棚田の風景を眺めていると、そんな集落の人々のまなざしが伝わって来る。

ここは誰もが子供の頃の楽しかった出来事、人々の優しさを思い出すことができる、そんな不思議な場所だ。多くの人がこの歴史ある木造校舎のぬくもりの中で、船坂の子供たちをのびのびと育てた自然あふれる風景を眺めながら、その子供たちを見守って来た集落の人々の温かいまなざしを感じとって欲しい。

土佐道子プロフィール

一級建築士事務所 土佐空間デザイン 代表
兵庫県建築士会まちづくり委員会 委員
兵庫県ヘリテージマネージャー・兵庫県
景観アドバイザー



西宮市の都市景観形成建築物(指定年)

松山大学温山記念会館(2012)
濱甲子園倶楽部会館、山本清記念会館、船坂西口邸(2011)
夙川カトリック教会聖堂(2009)
神戸女学院 講堂・総務館、図書館、文学館、理学館及び音楽学部一号館(2008)
聖和大学4号館及び旧宣教師館(1995)
今西邸、芝辻邸、細木邸(住宅)(1993)
武庫川女子大学甲子園会館-旧甲子園ホテル(1990)
関西学院大学 図書館及びランパス記念礼拝堂(1990)

兵庫県の景観形成重要建造物(指定年)

夙川カトリック教会(2012)
武庫川女子大学甲子園会館(旧甲子園ホテル、2009)
関西学院大学時計台及びランパス記念礼拝堂(2006)

浜脇中学校の椰子の木



西宮の学校建築と景観

西宮市の公共建築を巡る中で、最初の出会いは夙川小学校でした。校門と正面玄関のたたずまいは昭和初期の空気を伝えています。アールデコ様式でしょうか。でもあとで、この建物は最期の時を迎えていたのを知りました。

昭和11年(1936)に建てられた夙川小学校は、お別れの会を行い、2011年取り壊され現在建て替え中です。レトロなデザインの校門階段は残っているようです。



次の出会いは浜脇小学校。校庭北側の旧校門には門柱だけが残っています。校舎はかがやくばかりにきれいなスカイブルーのタイルをまとい、屋上庭園が段状に広がっています。

昨今、学校は周辺にも開けた印象が強く、建物は低く低彩度で高さも配慮し圧迫感のない建物が多く、校庭のフェンスもシースルー、植栽もアイレベルを透かすように剪定しており、死角をもたせない、防犯に配慮した設計のようです。

周辺の住民にとって学校は防災拠点であり、緑と青空が気持ちよく望める都会のベイキャントエリア(空地)としての役目にもなっているようです。ときに舞う落ち葉がご迷惑かも知れませんが、それもひとつの自然現象として親しんでおつきあい願いたいものです。

他に西宮市の学校をめぐってわかったのは、南国生まれの椰子の木がそびえている学校の多いことです。とくに海側の学校では楽々と校舎を超える高さにまで育っていて壮観です。

昭和30年代以降、学校建築は児童数の増大に追いつくように、たくさん建てられました。多くは「標準設計」にならない、デザイン性より機械的で画一的な印象のある鉄筋コンクリート造が主流でした。

最近になって少子化と耐震化の波は建物の統廃合や改修・更新を促しています。教育熱心な西宮の人々にとって次世代を育む学校施設は節目を迎え、多くが懐かしい姿を消していっています。

だれにとっても懐かしい「学校」という響き持つ大型建築は、地域景観の要となりこれからは人々の心のオアシスとなっていくことでしょう。市民と児童の共有空間として建物のみならず、校庭やバックヤードまで気持ちの行き届いた空間利用と設計計画が求められます。

全体に残念だったことをひとつ。学校関連施設として校庭に増築された後補施設のデザインがとても姑息的(=間に合わせ)であること。あまりにも…。

古さと新しさ、歴史と未来を創る学舎として



甲東小学校のコンクリート校舎



深津小学校のコンクリート校舎



浜脇小学校の新校舎と旧校門



樋ノ口小学校の椰子の木



その他の西宮の公共建築の例

1924年 船坂小学校（ランチルーム）

1936年 総合教育センター

1952年 大社中学校

1955年 船坂小学校（校舎）

1956年 広田小学校、春風小学校、上甲子園中学校、学文中学校

1957年 上甲子園中学校

1961年 上甲子園公民館

1964年 夙川公民館

1967年 勤労会館、市民会館

1971年 市庁舎

1972年 教育委員会庁舎



景観生活【西宮編】 2021年度 Version2.2(WEB用)

Copyright © 2010- All Right Reserved. 景観生活-西宮編 無断転載はご遠慮ください。
この冊子は兵庫県景観形成支援事業景観形成等活動助成金 により発行しております。
西宮の景観文化を思い、拙い知識で綴っております。お気づきの点ありましたら下記まで、ぜひお知らせください。

事務局：
和の住まい設計

<http://www.kazabito.com>